



46 秩父霊峯春暁 横山大観 一幅

昭和三年（一九二八） 絹本墨画  
六七・七×一一三・五

本図は、大正天皇の第二皇子・雍仁親王（一九〇二〜五三）が、大正十一年六月二十五日の成年式に際し秩父宮の宣下を受けられたことにより、そのお祝いの品として秩父神社が横山大観（一八六八〜一九五八）に制作を依頼し、昭和三年に完成したものである。横山は、画家の中村岳陵（一八九〇〜一九六九）、史学者の斉藤隆三（一八七五〜一九六二）らと共に昭和三年四月二十日に現地へ赴き、翌日にかけてスケッチを重ねた後に下山、六月中には作品を完成させている。

大観は、明治二十二年二月に開校した東京美術学校の第一期生であり、明治二十九年第一回絵画共進会で初めて大観の号を用いて『寂靜』を出品して以降、文展、院展等に精力的に出品を重ね、米国や欧州で作品展や出品を行う。また、同期の下村観山らと共に日本美術院を創立、院展を牽引し、帝室技芸員、芸術院会員を務めるなど、明治から昭和期にかけて意欲的に日本画の改革運動を行って、芸術的にも、社会的にも大きな影響力のあった作家である。画家としての評価も高く、朦朧体と呼ばれる大胆な没線描写による新たな表現を試み、鮮やかな色彩表現で装飾的画風を展開し、水墨表現の追求によっても新境地を拓く。大観の飽くなき表現追求は、近代日本画の可能性を拓けることとなった。

そうした大観の多くの作品の中でも、本図は実に真摯な写実的態度によって制作された正統的な作品である。明治四十三年の中国旅行を契機に水墨表現の追求を行った大観であるが、墨の色、墨の濃度、墨の量かしなどをよくよく研究していることが、他作品からもうかがえる。実際のスケッチをもとに、春の暁、秩父連峰に立ちこめる朝靄、澄み渡る空気感と明けきらぬほのかな光の輝き。その雄大な自然の姿を見事に表現した本図は、大観の確かな写生眼と培われた確かな表現技術によって、平明ながら情趣豊かな気品高い画面に仕上がっている。大観の作品の中でも、最もその優れた力量が発揮された名品である。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

古典再生 — 作家たちの挑戦

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 72

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十八年三月二十六日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sanjūmaru Shōzokan